

<フォーカス>

日中文化交流のルーツは「夏の禹王」だった

先日、神奈川県西部、酒匂川のほとりにある開成町の露木順一町長が訪ねてこられた。開成町は人口1万7千人、面積6.6平方キロ、県内で一番小さな町である。しかし、露木さんは県内でも屈指のスケールの大きな首長さんだ。

この日の露木さんの話もスケールが大きかった。なにしろ、今から4000年前、紀元前2070年ころに誕生したとされる中国最古の王朝、夏の創始者・禹王を、現代的に顕彰し、記念する全国シンポジウムを開きたいというのである。

夏王朝は長らく伝説上の幻の王朝と考えられてきたが、革命後の中国考古学の目覚ましい発展により、実在の王朝だったことが分かってきた。禹王は、父が果たせなかった「暴れ川」黄河を独特の工法によって鎮め、農民を助けて農業を興し、質素・儉約を旨とし、「治水の神様」として広く崇敬されるようになった。

この禹王が、実は中国本土だけではなく、台湾、韓国、そして日本でも治水神として大きな崇敬を集めてきていたという。開成町の郷土史研究家の皆さんの熱心な探索によって、関東以西の10河川、18ヶ所に禹王を祀る記念碑や神社があることが分かった。

酒匂川には、兩岸にそれぞれ記念碑と文命宮がある。記念碑の碑文は八代将軍吉宗の命で、治水工事を担当した田中丘偶(元川崎宿名主)が起草し、荻生徂徠が手を入れたとされる立派な碑文である。この神社(文命宮)の祭神は「夏禹王」と明記されているのも驚きである。町長の説明によると、江戸時代には禹王の名は広く庶民の間にも浸透していたのではないかという。

私はこの話を聞いて、胸が熱くなった。河川の氾濫に苦しんできた日本の庶民が、4000年前の治水神、夏の禹王を崇敬し、堤防などに祀って河川の平穏を祈ったという心情に、深い共感を覚えたからだ。

江戸時代に庶民の間に広く存在した兎王への信仰は、まさに日中文化交流のルーツだった。庶民の中に、禹王が生きていたのだ。11月28日に開成町で開かれる全国シンポジウム「兎王・文命サミット」を神奈川日中友好協会としても全面的に応援することにしたのは言うまでもない。

なお、開成町の町名は易経の「開物成務」(物を開き、務めを成す=真理を探究し、責務を果たす)に由来し、町立文命中学は禹王の名「文命」に由来するという。この小さな町が古代中国の文化と深いつながりがあることに、時空を超えた壮大なロマンを感じる。